

肺野の雲状影の部は組織的に未分化癌小細胞型と扁平上皮癌の混合型，右下肺野の肺化膿症を思わせる部は扁平上皮癌が主体をなし，左中肺野の充実性の腫瘤状陰影の部は未分化癌小細胞型の単一型だった。

50. 興味ある組織像を呈した肺癌(腺癌)の一例.

熊本大学第一内科 尾崎輝久

菅 久子, 徳永勝正, 岳中耐夫
樋口定信, 福田安嗣, 安藤正幸

志摩 清

国立療養所再春荘 岩崎健資

小清水忠夫

症例は52才，男，自覚症状なく，集検にて，胸部異常陰影を指摘され，低分化型腺癌と診断。左全葉摘出により， $S_{1+2}C$ を中心とする $4.5 \times 3\text{cm}$ の乳白色で硬く，境界明瞭な腫瘍を認めた。組織学的には，腫瘍の辺縁部で，ごく一部に乳頭状ないし管腔形成を認めるが，中心部に移るにしたがい，癌細胞は充実性に増殖，癌細胞の胞体は明るく，細胞のまわりには多数の小嚢胞状空隙を形成し，更に細胞間には，本腫瘍の特徴所見であるエオジンに淡染，PAS陽性の硝子様物質が沈着，一部では全体をこれが占めている像も認められる。以上より，この症例は，確証はないが，通常肺癌とは異なった気管支腺由来の癌と考え，今後更に詳しい検討を加えたい。

51. 転移性肺腫瘍について

久留米大学医学部第一外科教室
衛藤道生, 喜多隆昭, 武田仁良
桑野建治, 猪口轟三, 脇坂順一
教室に於ける臨床例と併せ，最近10年間の本学病理剖検記録から，肺への遠隔転移の状態を調べてみると，約35%に肺転移が認められた。また，剖検時，肉眼的に広範囲に肺転移巣がみ

られる症例においては，鏡検的にも周囲への浸潤が著しいものが多いが一方，孤立性の肺転移の場合でも目に見えない微小転移巣が予想外にみられる。これを病理学的見地から，転移性肺腫瘍に対する手術適応の妥当性について考察した。

52. 縦隔に発生したGerminal Tumor

長崎大学第1外科 柴田紘一郎
綾部公懿, 足立晃, 日石満州男

柴田興彦, 窪田美佐雄

富田正雄, 辻 泰邦

2例の Germinal Tumor を経験したので，その臨床および発生病理学上若干考案を行った。

1例は手術不能で生検のみ施行し，術後Liniac8000 R照射して腫瘍の縮小みるも，1年後局所再発にて死亡。2例目は術前6000 Rにて手術，腫瘍切除，術後前胸部3000 R，リンパ節転移あり，鎖骨部に4750 R照射にて腫瘍縮小するも，3ヶ月目に心肺不全にて死亡す。しかしこの症例は，病理学的に摘出縦隔腫瘍，頸部リンパ節生検，剖見時の腫瘍組織像は異っていた。つまり放射性感受性の強いセミノーマ部分だけが消失し，teratogenesisも抑えられた結果，単一構造のものとなったものと思われる。

53. 肺のadenoid cystic carcinomaの3例

九大二外科 白日高歩
国立九州がんセンター

大田満夫, 安元公正

気管支粘液腺由来の腫瘍のうち，cylindroma type のいわゆるadenoid cystic carcinomaの3例を経験した。3例中第1例は気管支末梢領域から発生し，臨床的に肺性肥大性骨関節症の症状を呈し，同症状は術直後より改善した。第2例は手術不能で

あり，放射線感受性は認められなかった。第3例は手術不能例であったが9年間生存し，low grade malignancyを裏づけるものであった。(組織像はいずれも異型性の比較的少ない細胞によるcribriformな形態が認められ，Alucian-blue PAS陽性であった。)第1例については電顕的検討を行った。

54. 『中葉症候群を初発症状としたMalignant lymphomaの一例』

熊本大学医学部第一内科

菅 守隆, 浜田和裕, 立石徳隆

福田安嗣, 安藤正幸, 志摩 清

症例は24才男子で，主訴は持続性の咳・痰・喘鳴発作，発熱。現病歴は17才頃より，咳・痰が続き，48年6月胸部X線にて中葉症候群，低 γ グロブリン血症を認め入院となる。入院後AB-PC投与，約1ヶ月後全身に紅斑が出現，皮膚生検にてReticulum cell sarcoma，リンパ生検にては異型細胞を認めるのみで，lymphoblastの浸潤は明らかでなかった。(ツ反(-)，DNCB(-)で細胞性免疫の低下，免疫グロブリンにてIgG600ng/dlと低値を示しており，血清蛋白6.2g/dl， γ グロブリン8.2yで但 γ グロブリン血症を認めている。)immunological surveillanceの長期低下が今回のmalignant lymphomaの発症につながったのではないかと考える。

55. 「特異なレ線像を示した肺癌の2例」

久留米大学倉田内科 横田孝義

外山博之, 岡本鎮弥, 立花征幸

松林皓爾

久留米大学第I外科 岡田 清

星子哲彦, 武田仁良

久留米大学放射線科 谷村陽子

症例1)29才の男性。胸部レ線